



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	「にござえ」注解（一）
Author(s)	山本 洋
<i>Citation</i>	文林（BUNRIN）, No.15：17-41
Issue Date	1981
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

「にぎりえ」注解（一）

山 本 洋

本稿では、樋口一葉「にぎりえ」の注解をこころみた。こ

でいう注解とは、語義の説明と事物の説明とである。「語義の

説明」においては、言い換えや、あるいは意味と表現との解説

を行ない、また必要に応じて表現意図や修辭的効果にふれ、「に

ぎりえ」中における照応関係を示し、さらに一葉諸作中の用例

を引いた場合もある。「事物の説明」においては、その事物・

事柄のできるだけ具体的な内容を説明し、またそれらに関する

当時の事実や事例、それらの与える印象や情感などについても

つとめて記述するようにした。ただし、「にぎりえ」の主題や

構想に深くかかわってくる叙述そのものの分析については、で

きるだけ避けた。本稿が、さらに長大なものになることをおそ

れたためである。本稿では、「にぎりえ」の本文は再掲せず、

該当の箇所だけを太字体で示した。その箇所は、拙稿「校本

『にぎりえ』（『文林』第十三号、昭和54・3）の本文にしたがった

が、漢字の旧字体は現行の字体に改めた。該当箇所の改訂につ

いては、注解のなかでしるした。

本稿の注解にあたっては、先学の注釈の恩恵を多くこうむっ

た。次にそれらを掲げて、先学に敬意を表したい。それととも

に「にぎりえ」の演習で協力をえた勤務先の学生諸嬢、また他

大学の学生諸君にも感謝の意を表したい。

○長谷川時雨

『評一葉小説全集』昭和13・8・15刊 富山房

○久保田万太郎稿
戸板康二註

『樋口一葉全集』昭和16・7・18刊 新世社

○次田潤

『評一葉名作集』昭和32・4・20刊 明治書院

○塩田良平解説

『旺文社文庫』昭和42・8・1刊 旺文社

○岡田八千代校註

『角川文庫』昭和43・7・30改版 角川書店

○和田芳恵注釈

『日本近代文学体系8』昭和45・9・10刊 角川書店

○山根賢吉編

『校注一葉名作選』昭和46・3・30刊 学友社

○関良一校注

『講談社文庫』昭和47・1・15刊 講談社

○前田愛編
脚注・岡保生

『全集 樋口一葉』昭和54・10・1刊 小学館

○木村真佐幸

『樋口一葉』昭和55・2・30刊 桜楓社

なお、その他の注記事項を列記する。

1、先行の注釈によって解明されており、疑義を感じなかった語句については、取り上げなかった。

2、注解の文章中「当時」とあるのは、広義には明治二十年代をさし、狭義には明治二十七、八年ごろをさす。また地域も、その当時の東京市内を念頭においている。

3、一葉の作品以外の引用文においては、その表記を一部改めたものがある。

4、用例を引いた作品のうち、作者名のないものはほぼすべて一葉の作品である。

5、注解のため参照した文献は、本稿では著者名・書名のみを記載するにとどめた。

6、適当な挿絵の見つかったものについては、それを借用し、その出所を明記した。

7、本稿では、「にぎりえ」の第一章だけを取り上げた。

(一)

木村さん信さん 同一人物の姓と名とを重ねた多少くどい呼びかけ方。以下本文の会話中に見られる酌婦お高の執拗さに応

じている。相手の男性の名前を親しげに呼び立てるのが営業上の手腕。二葉や 主人公お力の勤めている店「菊の井」とは別の、銘酒屋の店名。同じ新開地にあり、おそらく菊の井と張り合っている店。「お角^{かく}」という酌婦がいる。「二葉屋」という店名は実在したものとしては、たとえば三股中州^{さんこちゅう}の出茶屋にも（『岡場遊廊考』）、吉原土手下の料理店にも（『文芸倶楽部』臨時増刊、明38・7）あったが、かなりありふれた一般的な店名でもある。二葉町という町名も本所や芝にあった。お湯^ゆ 銭湯、またそこでの入浴をさす女性語。第八章の「湯屋の帰りに男に逢ふ」と呼応していて、銘酒屋街の比較的近辺に湯屋のあることを示している。馴染 ここでは、よく知っている客、よく店へ通ってきた客という程度の意か。遊里では、遊客がはじめて登楼するのを「初会」、二度目を「裏」もしくは「裏を返す」といい、三度目で「馴染」という。『色道大鏡』には「尋常^{おつづ}のなじみといふは、年久しく昵^{ひつ}び来れるにいへども、当道にては、まづ女郎に、心かはらずして久しくあひたる男をさしていふ詞なり。されどおほかたは、女のかたよりいふ詞なり。」とあり、『近世風俗志』には「馴染前は房中にも細帯を解くこと甚だ稀なり。馴染後は必らず細帯をも解くなり。すなわち寝着帯を解くなり。また馴染を付たる客には客の定紋付簪筥等を製し女

郎部屋に蓄ふことなり。」とある。突かけ下駄 すりへった駒下駄などのまえ鼻緒に足の指を軽く突っかけて、引きずるよう歩く無造作なはき方。作品38に「後のへつた駒下駄をざらり／＼と引ずりながら」、作品26に「うれしさに胸どき／＼して店前の下駄を突かけばきに走り出て」という用例がある。本作の木村信なにがしという男は、未定稿Cのように「突かけ草履（の八熊）」とか『たけくらべ』のように「三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子」とかあれば、「職人や遊び人ふう」（関・和田・塩田説）と断じて差しつかえなからうが、ここでは無理ではないか。近所に住む男がはきへらした下駄をひっかけて銭湯へ行く姿と見るべきであろう。『たけくらべ』には、「一風呂浴びて日の暮れゆけば、突かけ下駄に七五三の着物」とある。

小言をいふやうな物の言ひぶり 非難したり咎め立てしたりするような物の言い方。腹も立たずか言訳しながら お高に「小言」をいわれるようなひどい言い方をされているのに、おとなしい木村信なにがしの受け応え。威勢のよい職人・遊び人などとはここからも考えられない。舌打しながら 男に逃げられたお高の、いまいましさの表現。女房もちに成つては仕方がないね 男も結婚すると身持ちが堅くなつて駄目だ、の意。店に向つて かど口から、菊の井のおもての間のほうへ。「店」

は、おもての間。御述懐 お高の未練がましくどくどくという愚痴を、お力が親しげにからかった表現。焼棒杭と何やら緑雨本以下は「焼棒杭」と改訂。ことわざ「焼棒杭に（は）火がつきやすい」によっている。以前につながりのおった男女の間柄は、いったんその関係が断ちかれてもふたたび以前の状態にもどりやすいの意。『俗諺辞林』（明34初刊）によると「焼ばつ杭に火がつき易い かつて焼けたるものには、火がつき易きが如く、すべてその感溺したところの事には、たとひ一旦警醒したるが如くなるもまたその心を動かし易きをいふ」。よりの戻る 「縋りがもどる」は、別れた男女がふたたびもとの関係にもどることをいう。本来、糸・紐・縄・綱などは、二本以上の原糸に縋りがかけられてよじり合われている。だからその原糸を二つにほどき分けても、縋りの力によって自動的にすぐ元の状態によじり合わされてしまう。「縋りがもどる」は、そういうところからきた比喩的な慣用語。呪まじな 神霊の（仮想された）一種の通力に依存して、災禍をのがれたりあるいは与えたりしようとするわざ。ここでは、遊里で一般的に行なわれていたまじない（あるいは占いもふくむ）のことで、足の遠のいた客を招き寄せるために女郎や芸者などが行なう呪法をいう。『たけくらべ』第八章にも「待ち人恋ふる鼠なき格子の咒文」とある。

長谷川時雨の評釈によれば、「鼠なきは、口でチュウ／＼といふので、鼠はものを引く客を引くといふ縁起をかつぎ、今少しふくみたることもあらう。格子の咒文は、格子をトントンと叩いて、口のうちに願ひごとをする」ことである。鼠なきのことは、歌沢にも「鳥影に鼠なきして笑はれる　これも苦界の憂さはらし　愚癡が吞ませる冷や酒はしんきしんくの　アア苦の世界」と見えるが（『日本名著全集』28）、鼠算、蛙のまじないのことも「夜の雨もしや来るかと鼠算　紙で蛙のまじなひも　蟲が知らせてともし火の丁字もとんだ今時分　気まぐれざんす　エエぬしの声」（前出書）と歌われている。これらはまた川柳にも詠まれている。「鼠算二本の指の千鳥足」「丁なら来なんす半なら来なんせん」「仕舞には来るにしておく鼠算」「待ちかねて女郎蛙へ針を刺し」「春着の工夫待針を蛙の背」「待人の蛙をかしの形りに出来」　鼠算は、簪を鼠算の上に投げ、その落地点から鼠算の目をへりまで数え、偶数（ちよう）なら「待ち人来たる」、奇数（きず）ならば「来ず」というぐあいに馴染客の来るのを占うものであり、蛙のまじないは、折紙で作った蛙の背中に来てほしい馴染客の名を書いて待ち針をつき刺し、人目につかぬ所へ置いておく。客がくればその針を抜いて蛙を川へ捨てるというものである。そのほか、盃を着物の下にしめる細紐でしばって床

の間にのせておくとか、藤原定家の「こぬ人をまつほの浦の夕なぎに」を三回となえ、その人が来れば下の句の「焼くや藻塩の身もこがれつつ」を言うというのもある。

運の悪い者　これはお高が自分のことを言っている言葉であるが、これによってお力の運の良さが対照的に示唆されている。お力はこの場面で、他にも①朋輩に気をつかう、②手腕（後稱）がある、③上位に立つ女というふうにならされてきている。木戸番　本来、芝居小屋・見世物などの興行場の入口（すなわち木戸）で、客の呼びこみをしたり番をしたりする人間。そこから、店先で遊客を呼びこむ役ばかりしていて、いっこうに客のつかない女をいう。お高が自分を自嘲していることは、肝癪まざれ腹立ちのあまり。「肝癪をおこす」は、腹立ちや怒りをこらえきれず突発的、急激にあらわすこと。駒下駄　原材から歯の部分を取りぬいて作った下駄の一般的名称で、いくつかの種類がある。ここでは、閑説にいう「ふつうの下駄」ではなく、台は浴衣の季節に合わせて木地のまま、角は丸く落としたやや小型の女用のもので、おそらく前のめり（前衛が台から斜めにゆるくつけられたもの）の鼠算の駒下駄、すなわち「あと丸小町」ではないかと思われる（平出鑒三郎『東京風俗志』、藤沢衛彦『明治風俗史』による）。ただし鑓木清方『にこりえ絵巻』（昭和9）では、「ふつうの下駄」

に描かれている。二十^(はたち)の上を 長谷川時雨の「われから」の語釈が参考になる。「今日の二十六歳は、お嬢さんと、人も我もいふが、十三小娘、十五六から娘、十九二十歳は大娘、新造^{しんぞう}、二十二から年増^{としま}、二十五越せば大年増、三十姥桜^{うばざくら}といつたふうな、昔の名残りのまま。」これに応じた叙述は、一葉の草稿にも見られる。「惣じて女子の十五六は肉づきふつくりとして、霞めるやうなる面ざし、たとへば夜明の花の露をおびて、清らかなる色の少しはおぼろげなるこそ可愛けれ、十九といひては丈のそだつも今歳まで、女子一人前子供ばなれのする時なり」(作品題)つまり二十七歳ないし三十歳ぐらいであるお高は、大年増とか姥桜とかいわれるような年格好なのである。

引眉毛 本^{ほん}当^{とう}の眉毛を抜いたり、または剃^はったりして、眉墨で三日月のように書いた眉。作り生^{はな}際^{はなは} ひといの上の髪の毛の生えぎわに墨をぬる化粧法。生えぎわをきれいに剃刀で剃るなどして、墨をひたいとの境目には濃くはつきりと、髪の毛のほうへは薄くぬる。それによって、ひたいをくつきりと美しく見せ、また形を富士びたいにしたり、広すぎるひたいの場合には狭く見せたりする。(江馬務『結髪化粧小間物履物史』による) 白粉べつたりとつけて 野暮^{よぼ}りたい化粧のしかた(『鰐魚全集』12)。お高が大年増であるからか、あるいは田舎出身であるからか。お力

の薄化粧と対照的。人喰ふ犬の如く 唇の紅が「人喰ふ犬の如く」というのは、お高の口紅のぬり方が人を噛み殺した野犬の口元のように毒々しく濃いことの誇張表現である。唇の輪廓からだらしなくはみ出したようなぬり方をいうのではない。江馬務『結髪化粧小間物履物史』によれば、「唇に塗ることが濃厚になつては口が大きく見えるから、その塗方を奥へ深く入りこまぬやう、また左右にあまり延びないやうにするので、またあまり濃い時は顔が堅く見え愛敬が失せるために淡白に塗るのであつた。」それにしても、この「人喰ふ犬のごとく」という表現は強烈でありすぎる。それはどこから来ているのか。「人喰ふ犬」は、なるほど「狼の異名」(塩田寛)でもあるが、この場合はやはり犬である。狂言や「醒醉笑」にも出てくるし、現今でも野犬や飼犬が人間をおそい怪我をさせたり殺したというニュースはかなり報道されている。「人喰ふ犬」という表現は、おそらく一葉自身の実際の見聞によっているのではないかと思われる。一葉と同じ明治五年生まれの岡本綺堂は、十六歳の二十年八月、麹町の自宅から本郷の春木座へ「牡丹燈籠」を歩いて見に行ったときに、おそってくる野犬と闘つてそれを追つ払うため棒を持って行つたと回想している(『綺堂芝居ばなし』)。明治二十年代までの東京の市中には、維新時の六割にのぼる武家屋敷の

無人化と取り壊しとによる荒廃が原因となって、かなりの数にのぼる野犬が繁殖し群をなして横行していたようである。なかには獠猛凶暴なのが子供や女性や老人をおそって殺したということも往々あったと考えられる。一葉の他作中では「犬の子の声恐ろしけれど」(『別れ霜』)といった叙述しか拾い出せないが、「人喰ふ犬の如く」という表現はおそらく一葉の実際の見聞から来ているのではないかと思われる。

お力 ここで初めて主人公の名前が提示される。松坂俊夫氏は、その典拠を歌舞伎「名歌徳三舛玉垣」の「お力」に求めており(『二葉小説の人名の典拠と方法』)、それは一つの妥当性を持っている。だが他方、文化四年の吉原細見によると遊女一四四人中に、また慶応元年の柳橋の芸者名覧によるとその九四人中にいずれも、「たか」「てる」と共に「りき」という名が見える(岸井良衛『女芸者の時代』による)。「にぎりえ」中の料理屋菊の井の三名の酌婦名が、いずれも揃って右に記載されている所が興味をひく。ここではそれ以上の意見を述べる資料も根拠もないが、「お力」という名がかなり一般的であったということは指摘できよう。そしてその名にこめられた主意は、「りきむ」「はげむ」「力行」といった所にあるのではないかと思われる。ちなみに次に引く未定稿Aは、「おりき」に傘を貸してもらった

学生が、「菊の井のりき」と告げられたその名について逆説的な感想を述べている心中思惟の箇所である。「苗字は何と聞いた、菊の井であつたか、名はりきと聞いたが、あんな弱々しい風で大層つよい名がかしい、菊の井のりき子、どうしても目尻がつりあがつて金歯でも光らしさうだ、嶋田などに結つて居さうには考へられぬ」 中肉の背恰好すらりつとして「中肉」は、あまりこえても痩せてもいない肉づきの体軀をいう。が、下の「すらりつとして」という表現や、お力の母親が肺結核で死亡したことから考えると、いくぶん痩せ型のほうにはいるのではないかと思われる。またこの叙述は、貞享二年版「好色増鏡」の「年の程十七八計なる娘のいと可愛らしきあり、ぼつとりとして、ふとりもせず、背すらりとして高からず、面体おもながにして、しもふくらなるは土佐やうの美人なり」(『鰻魚全集』12による)といった叙述に照らし合わせると、江戸期からの代表的美人の基本的なスタイルをあらわしているといえよう。

洗ひ髪 洗いたての髪。洗ったままで結い上げずンバラの状態の髪(有名な芸妓「洗ひ髪のお妻」のごとき)ではない。

『たま櫛』に「洗ひ髪の束髪」、「経づくえ」に「洗ひ髪の投げ島田」、また明治二十八年五月七日の日記に馬場孤蝶の句として「夏はやし女あるじがあらひ髪」という用例が見える。未定

稿Cには、「新開の菊の井に洗ひ髪のおりきとて此辺きつての顔よし、髪の毛の見事なるに」「此処の名物洗ひ髪のおりきとて」などとある。新わら さみだれや入梅のころ、田植に用いる早苗^{さなへ}の青々と色のすぐれたのを（「種^{たね}のわせ」という閑説は誤り）、近郊の農家の女たちが花柳界や下町へ「しんわらア、しんわらア」といつて売りに来た。その早苗は、熱湯をかけて蔭干しにしたもので（なかにはあさ緑に着色したものもあったらしい）、とくに水商売の女性たちはそれを「一握り五銭から拾銭位」（長谷川時雨）買って、鬘^{まげ}のいきな根がけにした。毎日新しいのを掛け、なかには一日に二度掛け替えるものもいた。新わらの切り目をそろえて掛けると、べっ甲や黄楊^{わうやう}の櫛の色、黒い髪の色とよく調和し、初夏のすがすがしい感じをたたえ、すっきりした色気を感じさせる髪飾りになった。江戸時代には洗ひ髪^{せんぱみ}の根をこれで結び「邪氣払いになる」（鏡田満文『明治大正風俗語典』）とか「血がおさまる」（和田秀恵）とかいわれた。新わら売りの来る近郊の農村とは、当時の東京市本所区向島^{うきま}請地町（旧・請地村は、他にも南葛飾郡寺島村、大木村、吾嬬村に分地された）、府下南葛飾郡南綾瀬村大字堀切、同郡亀青村大字亀有^{かめあり}などで、そこに産するものはとくに美しいので評判であった（伊藤晴雨『江戸と東京 風俗野史』）。未定稿Cには「新わらの根がけさわやかなる出たち」

Rights were not granted to
include this image in electronic
media. Please refer to the
printed journal.

立膝・浴衣（錦木清方「にぎり」挿絵、『現代日本の美術』集英社、昭和51刊より。）

立膝は、「もつぱら

堅気の女性からすれば大へんじだらくな見っともない坐り方ということになる。

などとある。立膝の無沙汰さ 乙羽本以下「無作法」に改訂。「立膝」は、いわば正座の形から片膝だけ少し内寄り斜めに立てた坐り方である。安楽でもあろうし、いきでもあり、また起居の動作を起こしやすからうが、堅気の女性からすれば大へんじだらくな見っともない坐り方ということになる。

商売女の間に行なわれる仇っぱい姿^{あひまゐり}で、「時折り立膝を崩して展開、客のこころをそそった」「挑発的な姿態」（中野実三『遊女の生活』）であった。そして本作における、着物の胸を乳のあたりまでくつろげて色白の肌をこれみよがしにし、長烟管をくわえて立膝というお力の姿は、近世からの類型的な遊女の描き方が踏襲されているといえるのではなからうか。

大形の浴衣 乙羽本以下「浴衣」と改訂。「大形」は大形模

様。「浴衣」は、木綿のひとえ地で、ひろ袖、白生地に藍や浅葱あさぎ（ライトブルー）で模様を染めたきもの。初夏から夏季に着る。

明治期には盛んに用いられたが、大正時代にはいると、一般の女性には中形模様の浴衣が愛好され、大形は玄人向きとされた。

挿絵画家で知られる木村莊八の「浴衣小感」によると、中形浴衣は中形という一種の模様のひとえにすぎず、「軽便文化夏衣」ともいふべきしるもので、そこには浴衣本来の美しさが無い。

浴衣はやはり、発祥のころの大形でないといけない。弁慶縞とか格子縞とか種々の縞などの直条模様の浴衣であってはじめて、「中の丸味を蔽うて味感〔が〕きりつとしまる、そこから

粋も洩さも出て来る」という（『東京の風俗』）。初出『文芸倶楽部』の中江とき（玉桂）の挿絵では、お力の浴衣の模様は、笹龍胆ささりんどうや根笹ねざさに似て非なる五枚笹と何かのごまかしとの絵柄に

画かれているが、鐔木清方の昭和九年の『にぎりえ絵巻』では、一見棒縞に見えるような八笹の葉と太青竹▽が画かれて印象的である（他の場面のお力の浴衣は、うろこ、くずし青海波、すすきなどの

模様）。本作での「大形の浴衣」は、おそらく大柄の棒縞か、もしくは鯉縞こひななり棧留縞せきりゅうなりのタテ縞模様がふさわしいと思われる。なお未定稿Aでは、「今日は目のさめるやうなる大形のゆ

かた」とあり、『埋れ木』では地廻りの無頼漢が「大形の浴衣」を着ているが、これはおそらく大柄の弁慶縞と思われる。

引かけ帯 別名、下げ結び。女性の帯を太鼓結びに結びひとつ手前で、垂れと端先はしきとを長くたらしめておく結び方。太鼓結びにする直前の段階で、垂れの部分（二重になつてゐる）と先端の部分（これは垂れよりも約三センチほど長くする）とをほぼ三分し、それらが臀部の下方までとどく長さにする。二重になった垂れの部分はきれいにきちんと重ね、帯枕を当て、巻いている帯の上端にその帯枕をのせて山をつくる。その帯枕は帯揚げで包みこむようにおおい、帯揚げの両端を胸の前で結ぶのである。したがっ

Rights were not granted to
include this image in
electronic media. Please
refer to the printed
journal.

てこの「引かけ帯」は、とくに女性の腰部だけでなく臀部をも
おいにかくす効果が大きい。なおまた「引かけ帯」は、じだら
くな結び方とか、下層の妻女の結び方とかいわれているが、当
時においては「晴れにはお太鼓、平常は引かけ」（平出「東京風俗
志」）という考え方が一般的であったと思われる。黒縹子くろいんすと何や
らのまがひ物 これは、腹合せ帯とも昼夜帯・鯨帯ともいわれ
る帯の布地について述べたもの。昼夜帯は、初期（元禄時代）のこ
ろ白縹子と黒ビロードとを合せて仕立てられたところから、洒
落て名づけられた。幅が鯨尺くじりぢやで九寸（二十四センチ）ぐらいの略式
の合わせ帯で、表と裏とに異なった布地を用いた。裏地は黒縹
子にきまわって、その光沢があり地が柔らかで密な織物の感
じが、表の柄や色合いをひき立たせた。表地は、高級なものと
しては塩瀬羽二重・縹子いんすなどであったが、普通は主として縮緬ちゅうもん
で鹿の子・石畳・草花などの模様が多かった。昼夜帯は、礼装
用の丸帯とくらべて、安価で、縹子ですべりやすいため結びや
すく、また粋・情緒という点でまきっていた。作中では浴衣に
締めている昼夜帯で、裏は黒縹子、表は未定稿Aの「大形のゆ
かた、黒縹子とちりめんを合せたる帯ゆるりとして」からみ
ても縮緬と見てよい。とすると、その縮緬を「何やらのまがひ
物」と表現する必要はどこにあるのか。安っぽい縮緬だが、高

級な縮緬（たとえば塩瀬縮緬・紋縹子縮緬など）に似ているというので
あろうか、よくわからない。未定稿Aの他の箇所では、「おり
き」はお召し縮緬の着物に「はかたと黒縹子」の合わせ帯をし
ているとある。

緋の平ぐけ 赤い色の縮緬の平ぐけ帯。平ぐけ帯は、鯨尺で
幅二寸ないし一寸ぐらいの、芯を入れずに平たくつけた帯。作
中の「（緋の平ぐけが）背の処に見えて」の叙述と、前項で一部引
用した未定稿A「はかたと黒縹子を合せたる帯の上にちりめ
ん、くけ、ひも」の叙述とから判断して、これは「帯の下に締める
細い帯」（蘭説）ではなく、おそらく帯揚げである。帯揚げは、
柔かくてかさばらずよく縮まる薄手の縮緬が用いられ（絹ではす
べりすぎる）、前述の引かけ帯に用いた帯枕をおおうようにして
胸の前で結ぶのである。そういう点で、生地は「練絹」（和田説
でもない。此あたりの姉さま風 この界隈における姐御ふうの
女。近辺の銘酒屋街のちょっとした女親分ふうの女性。「私娼」
という解は、断定しすぎか。天神がへし 江戸の後期から明治
にかけて流行した髪のかき方で、天神髷ともいわれ、銀杏返し
に似ている。銀杏返しは、もとどりを二つに分け、左右に輪を
作って銀杏の葉のような形にし、その毛先を元結で根に結んだ
ものであるが、「天神がへし」は、銀杏の輪を作ったあとその

中央部の鬚の根に玉簪^{たまかんざし}をさし、余している毛先^{みけ}（天神毛^{あまのかみ}といふ）を

簪に巻きつけて留めた結び方である。また、太い目にした天神毛を左右の輪毛の中央部に巻きつけ、そのあと玉簪をさして髪を留めたものもある。天神鬘は初め深川の遊里からはやりだしたといわれ、「天神」というのは「太夫」の次の位の遊女のことかとされている（金沢康隆『江戸結髪史』）。十六、七の娘から三十六、七まで結われた（金沢、前出書）が、多くは芸妓・遊芸の師匠・外妾などが結うもので堅気風のものではなかった（平出『東京風俗志』）。
先刻の手紙 他の客に出した手紙とも考えられないことはないが、やはり後に登場してくる源七への手紙と見るべき。
お愛想 ここでは、客を惹きつけるための社交的な行為の意。
直後にお高が「…お愛想で出来る物かな」と反論するなかにもこめられているように、実意が伴わず上べだけという意味がふくまれている。

巻紙二尋も書いて（ひとひろ）一尋は、長さの単位の一つで、人間がひろげた左右の手の指先のあいだの距離、約六尺をいう。「二尋」だと理屈上、約十二尺（約・六メートル）になる。しかし野外で仕事をしている男性の場合と、屋内で坐る生活をしている女性の場合とは、その一尋の長さ自体が相異なる。しかもここでの「二尋」は誇張表現だと解されるから、実際にはだいたい二メートル

巻紙二尋（三谷一馬『江戸吉原図象』立風書房、昭和52年より）

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

二枚切手の大封じ 通常切手を二枚貼った分厚い封書。明治十六年一月一日以降、前年十二月十六日布告の郵便取締手続条例により、書状は目方二匁^{もんめ}まで二銭、四匁まで四銭、六匁まで六銭、端書は並端書が一銭、往復端書が二銭と定められ、また二銭切手を通常切手と称した。これは、明治三十二年三月末日まで継続され、同年四月一日より封書三銭、端書一銭五厘に改定された（『近代日本総合年表』『明治館用大全』『明治世相編年事典』による）。
彼の人 後に登場してくる源七をさす。赤坂 この「赤坂」は、現・文京区内にあった花柳界だという説があるが、そうで

半ぐらいの長さであろうか。他方、巻紙に書く一行の文字数は、平均八字から十字ぐらいと考えられるから、「巻紙二尋」の手紙が伝達する情報量はそれほど多量ではないと考えるべきである。挿絵が一応の参考になろう。

はなくて、当時の東京市赤坂区田町二丁目から六丁目——さらに赤坂溜池町もふくむか——にあった花街だと見るべきではないかと思われる。現行の港区赤坂三丁目内に該当。（詳細な考証については、拙稿「『こころ』の背景」文林 第十二号、昭53・3参照）

取 止める ここでは、「彼の人」（源七）をしつかりと引きとどめる意。『うつせみ』では、「此纖弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて駆け出す時には、大の男二人がゝりにても六つかしき時の有ける。」とあり、抑えとどめる意。また本作末尾の「諸説みだれて取止めたる事なけれど」では、確かだと認める意。

あんまり冥利がよくあるまい 将来あんまりよいことがあるまい。「冥利」は、善行のむくいとして神仏が人知れず与える利益、幸せ、よい結果。「冥利がよくない」「冥利がわるい」は、当時流行語のように使われていたと思われるが、ここでのお高の台詞には、お力が今まで男（源七）にだいぶ入れ揚げさせたことが暗示されているし、また同時に作品上の効果としては結末におけるお力の無残な死が予告されているともいえるよう。
御異見 御意見と同じ。御忠告。御訓戒。『言海』には注記として「常ニ、誤リテ、異見ノ字ヲ書ス」とある。豪勢さ ぜいたくでえらいものだ。此身 お高の、三十歳に近く、器量も

よくなく、腕もなく運も悪い自分の身をさす。団扇を取つて足をあふぎながら 一種の照れかくしから出た動作でもあろうが、また足もとに飛来する蚊を半ば無意識に追いはらう動作でもある。団扇が室内に出されていることから見て、すでに蚊の出ている時期だと思われるし、水田を埋め立ててきた当時の新開地あたりにはとりわけ蚊が多かった。蚊については、第四章に「ふすく」と煙たちのぼりて軒場にのがれる蚊の声懐まじく」とある。昔しは花よ 都々逸「馬鹿にしやすんな、昔は花よ、鶯鳴かせたこともある」の一節。都々逸の大意は、（大年増とか婆とか）馬鹿にしてはいけませんよ、これでも昔の若いときには梅の花のような色香があつて、美しい梅の花が鶯をさそひ寄せて鳴かせるように、いい男にでもはやされたこともあつたのですよ。これには、類同の都々逸「梅干婆としなびて居れど、鶯鳴かせたこともある」がある。女性が梅、男性が鶯になぞらえられていることは、端唄（上略）小鳥でさへも一筋に、堪定むる気は一つ、わたしや鶯、主は梅、（下略）にも見られる。『花ごもり』には、「鶯なかせし末の人」と用いられている。言ひなし可笑しく 歌い方も実感がこもっていておかしく思われ。「可笑しく」は、お力の気持ちでもあり、また作者の気持ちでもある。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

店は二間間口^{けんまぐち} 店の表口の長さ(幅)が二間^{けん}。二間は、約三・六四メートル。そこには、四枚の腰障子がはまっている(未定稿による)。御神燈 「ごしんとう」とも「ごじんとう」とも。

御神燈 (伊藤晴雨「江戸と東京 風俗史」有光書房、昭46刊より)

神燈といって、提

燈を軒先に点じ、或は靴ぬぎにも点する。これは神を祭るの意で、家内に設けた神棚と同じく、夕には必ず灯をともし、燈を打つ。…この提燈は成田とか、その他とかの神へ献ずるの意味で、それらの神仏の紋を提燈の胴に一行に、もしくは全体に散らして附ける。その上に御神燈または三十番神などと書く。これを…芸者屋では看板ともいう。その家名をも大きく書いて、看板にも代用するからで、それに芸妓の名を記すのである。盛り塩 料亭・待合・芸妓遊女屋その他寄席や商家などにおいて、その店の戸口やしきいの上などに客寄せの縁起として三角錐のかたちに盛り上げた塩のこと。柳田国男「塩雑談」によれば、海辺に住む人々が朝早く汲んできた海水を身体にふ

りかけ、また松や竹の葉で家の周囲にもふりまいた潔斎、すなわち御塩斎^{ごしじい}の省略の形であるという(『定本全集14』)。また「唐の玄宗皇帝が牛に乗って多くの愛妾のもとへ通ったが、牛が塩を好むので、塩のある家へ足をとめた故事にならった」ものともいわれる(和田芳恵補注)。銘酒あまた棚の上にならべて 銘酒の一升壺をたくさん棚の上に並べて。「銘酒」は、特別の醸造法によって作られた特別の名のある清酒。近世以来、良質の水と原料の播州米と丹波の杜氏^{とじ}とに恵まれた摂津・灘^{なみ}(とくに今津・西宮)の酒造地で作られたものが最良の清酒とされ、海上輸送によって東京に運ばれていた。当時の銘柄としては「沢の鶴」(「桜正宗」が有名で(後引「東京風俗志」、未発表の一葉の作品38においても、若い書生風の男が「沢のつるや正宗は名斗きいて、ついしか御目にかゝるゝほどなし」とぐちる箇所がある。そのほか明治二十三年ごろには「明治」一升二十八銭、「白鶴」同二十七銭、「別品」同二十二銭、「鶴州」同二十銭などの銘柄があった(朝日新聞社編「新聞広告」一〇〇年)。また清酒の壺詰販売は、十九年十月ごろより行なわれた(「新聞が語る明治史」)。なお本作のこの前後の叙述から、「にぎりえ」における菊の井は「銘酒屋」であると小島烏水(「一葉女史」明29・11)以来断じられてきているが、菊の井の店の業種が何であるかは、主人公お力が純

然たる「私娼」であるかどうかに係わつてくるので、きわめて重要な点である。詳細な考証は拙稿「『にぎりえ』の背景」にゆずるとして、菊の井はより正確には暖味料理屋というべきであらう。ちなみに『東京風俗志』には、「又別に銘酒屋と称ふるものあれども、飲酒を旨とせず、店前の棚には酒壘・蜜柑・茄卵を列ね、密かに私娼を置いて醗業を営ましむるに過ぎず。酒は都下に醸造所なければ、遠国より輸せり。最も其の軽便なるより世に賞用せらるるものは、沢の鶴及び正宗の壘詰とす。」とある。参考のため、その頃の東京府下風俗営業の業種別数を掲げておく（『明治世相編年事典』ならびに岸井良衛『女芸者の時代』より作成。――は記載なきもの）。

年	業種	待	合貸	席料理店	銘酒屋	芸者屋	茶店	交湯店
明治25		三〇七	四二四	八七			一三〇	二
30		一	四七六	四七六			一四三	
31		四二六	五九五	一三七	八三一	三五八	一六二	
32		四六七	六一五	四〇八	三七一	四三三	二六八	

帳場めきたる処 帳場らしく思える所。帳場には違いないのだが、多少貧弱な帳場であるから、こういった。「帳場」は、帳付け、勘定、金銭の出納などを行なう所で、室内の一部が簡

単な格子で仕切り囲いされている。未定稿Aでは、「帳場格子の中にそろばんはちいて」とある。女主 店の女将。未定稿AならびにCによると、女将は「四十がつこう」で名前は「お才」というところまで構想されていた。寄せ鍋 鍋料理の一種で、魚貝類（タイ・ヒラメ・キス・イカ・エビ・貝のむきみ等）肉類（鶏肉・豚肉）魚加工品（かまぼこ・ちくわ）野菜類（キョウナ・ネギ・ミツバ・セリ・カブ・ダイコン・シュンギク・たけの子等）に、その他豆腐、しらたき、こんにゃくなどを一緒に入れ、煮ながら食べる。好みにより、柚のしぼり汁、大根おろし、七味唐がらしなどの薬味を用いる（本山猿舟『飲食事典』による）。なるも 作れるのも。御料理とぞしたゝめける 看板に書かれた文字をいう。馬場孤蝶によれば、一葉の書いた「御料理仕出し仕り候」という看板が隣の料理屋・鈴木亭にかかっていたという（『明治文壇の人々』）。仕出し 仕出し屋（自店で客を扱わぬ専門店 あるいは料理屋が、他の接客業者や一般家庭から注文を受け、料理や惣菜を作り整えて配達すること。何とかいふらん なんと返事をするだろうか、返事のしようがあるまい。手前店 わたしどもの店。「手前」は、わたし・自分の謙称。「手前」と「店」が複合してできた一語。類似の複合語に「手前銀」「手前細工」「手前普請」などがある。言ふにかたからん 言うのがむづかしいだろう。言

Rights were not granted to
include this image in electronic
media. Please refer to the
printed journal.

口がわり

(『日本料理』マコー社、昭50刊より)

世は御方便や 世間というものは都合よく
いていくだろう。
できているものよ。「方便」は、都合のよい手段の意。商賈が
ら 乙羽本以下「商売がら」。商売の性質あるいは内容。口取
り 口取りがかなの略で、饗応膳や会席膳のはじめに吸物とと
もに出される酒の肴。照り焼の魚と、えび・かまぼこ・玉子焼
・たけの子・ぜんまい・きんとんなどを三品ないし九品、細
長い角皿に盛合わせたもの。そのほか蛸・いか・鶏肉・ちくわ
・うど・椎たけ・ごぼう・山いもなどを取合わせる。口取り
は、料理を文字通り硯箱のふたに盛った
昔の習慣から硯蓋すずりふたともいわれ、折詰にし
てみやげにするのが通例であった(『博文館
『日本料理法大全』、本山『飲食事典』による)。
現在では口がわりという。

焼肴やきあな

鯛・鮎・やまめなどの姿焼き
(塩をふり原形のまま金串を打って焼いたもの)や、

まぐろ・ぶりなどの照り焼、付け焼(切身に
たれをつけて焼いたもの)を丸型・角型・花型
・扇形などの低くてふちのない皿に載せ
て出す。田舎もの ここでは世間知らず
の意。地方出身で、町なかのしきたりや

実情を知らない者。

一枚看板 特定の集

団において人気・評判・実力などの点で一番ずばぬけた者をいう。元来は上方語であり、江戸語では大名題おなづか(外題および主演俳優の名をしるした特大の飾り看板)というが、転じてその看板の上部の絵組みに描かれる大立者の役者のこと(前出『江戸語大辞典』)。また寄席でも、その一人だけで大勢の客を呼ぶことができる人気抜群の芸人をいう。ふつう三、四人の名前が書かれる入口の招き行燈にその芸人の名前だけが一人大きく書き出された(『正岡容『明治東京風俗語事典』による)。年は

随一若れども お力の年齢については数え年で、長谷川時雨説では二十歳、馬場孤蝶説では「モデル」の鈴木亭のお留のそれとして二十一、三歳、長谷川泉説では十九歳(『新編近代名作鑑

一枚看板

(『鑛木清方展』京郵新聞社、昭52刊より)

Rights were not granted to
include this image in electronic
media. Please refer to the printed
journal.

費」とされており、拙稿「『にぎりえ』の背景」においては二十歳という時雨説にひとまず従ったが、お力の推定される経歴や客扱いの達者さ等から判断して二十二、三の年増と見たほうがよいかもしれない。それであっても、お高・お照という菊の井の他の酌婦と比べて年齢は随一若いのである。妙ありてことばにつくせぬ巧みさがあって、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くい、少し自分の器量のよいのを(お力が)自慢しているのかと思うと、お力のあの顔つきが憎らしい。「思へば」の主語は、お力とも考えられぬことはないが、やはり朋輩と取るべき。「小面」は、つらを卑しめ憎んでいう語。存の外、ルビは乙羽本以下すべて「ぞんじ」。思いのほか。意外に。中世以来の用例は、「ぞんじのほか」。初出誌「文芸倶楽部」においては、「存」という漢字が行の最下に来ているため、ルビの一部「じ」が脱落したもののか。

女ながらも (男はもちろん) 女同士であっても。あゝ心とて仕方のないもの。ああ、持って生まれた気性というものは隠しようのないもので。「仕方のない」はやむをえない意で、ここでは蔽い包もうとしてもおのずと外面にあらわれるということ。面ざしが：牙へて見へるは 緑雨本以下「牙えて見えるは」に改訂。顔だちが：すっかり澄んで見えるのは。または、きり

っと美しく張りつめて見えるのは。「月影牙ゆ」といった伝統的な表現とイメージとを背景にして、『たま櫓』の「空に澄む月影きよし」、本作第三章の「雲なき空の月かげ涼しく」に見られるように、「牙ゆ」は「澄む。きよし。涼し」の意か。それとも、お力の内面の勝気さや気の強さがあらわれて顔だちがきわ立ってひき緊っている意か。新開 一般的には、雑木林や荒蕪地を切りひらいて田畑や宅地に造成したかなり広範な土地、すなわち新開地のことであるが、ここでは当時の東京市小石川区小石川柳町(明治十一年より四十四年にいたる正式名称)をいう。もつとも当時近辺の人々が「新開」と俗称していた所は、『白山三業沿革史』(昭和36刊)によれば柳町のほかに掃除町(大正十四年から昭和三十九年までは八千代町)、指ヶ谷町もふくんでいた。小石川柳町一帯は、明治十年代初めまではほぼ一面の水田であったが、二十年ごろからしだいに埋め立てられて人家が建ちはじめた。陸軍東京砲兵工廠は四年六月に小石川町一番地の旧水戸藩邸あとに移転してきていたが、それが発展するにつれ増えた職工めあてに、柳町裏通りには粗末な居酒屋・飲食店・商店・揚弓店などができ、日清戦争前ごろになると料理屋や銘酒屋も並びはじめ、夜店も出るようになり、柳町裏通りはかなり繁華な新興の盛り場になった。そして銘酒屋は、福山町・柳町二十二番地・

貴族院議員のち男爵細川潤次郎と太郎兵衛山との下の八千代町（舊餘町）・指ヶ谷町一四六番地近辺に点在していたといわれる（『白山三業沿革史』による）。しかし新開地というのは、特に明治時代の東京においては少しも珍らしいことではない。山の手、郊外をとわず至る所で、丘陵・荒地・田畑・沼沢などが造成開発され道路がつけられ建物が建てられていったが、そういう新開地には女性を置く特殊な業種の店の集中することが多かった。警察もその土地の隆昌繁栄のため、ひそかに行なわれる売笑行為を大目に見る傾向があった。ところで馬場孤蝶は、菊の井のある土地を一葉の住まいのあった本郷区丸山福山町としていた（『明治文壇の人々』）が、未定稿Aによるとその銘酒屋街は「小石川の柳町」「新開の中ほど」とくり返し述べられ、また「柳町の魔くつ」という表現も数回用いられている。未定稿Cには、「よしや伝通院の森に秋の風さわいで、白山から来る豆腐やの声うら淋しき霜がれのゆふべとでも、新開の菊の井に客足たゆる時はあるまじ」ともある。小石川柳町は、丸山福山町四番地（の一葉宅）のすぐ西側、区こそ違うが当時まだ市電のおおていかなかった道路をへだてた真向いの町で、銘酒屋街はその柳町二十二番地に実在した。そこが、「にごりえ」執筆時の作者に想定されていたことは確かである。

菊の井 お力の雇われている曖昧料理屋の店名。未定稿の当

初の段階から、「菊の井」という名称で一貫されている。馬場

孤蝶は一葉宅の隣にあった鈴木亭がモデルだと言っているが、

その架空の名称は、一葉の諸作中に「菊」が「根わけの菊」

（「別れ霜」）、「花壇の菊」（「たま櫛」）、「菊の花」（「五月雨」）、

「垣根の夏菊」「籬に菊の崩し形」「菊花投げつけて」「残菊

落葉」「菊桐」「菊の丸」（以上「うもれ木」）、「垣の菊の香」

（「琴の音」）、「籬の菊」（「やみ夜」）、「玉菊が燈籠」（「たけく

らべ」）といったように頻出することから見て、作者の好みによ

るところが大きいと思われる。だがさらに、浅草区千束町二丁

目二九八番地にあった待合「菊廼家」の名称とか、あるいはま

た為永春水の「菊廼井双紙」といった題名などが一葉の目にふ

れていて、多少の動機になっていたかもしれない。ところで関

良一氏の脚注には、「歌舞伎『番町皿屋敷』の連想でそう命名

されたか」という興味ぶかい指摘がある。もしそうだとした

ら、「菊の井」には恨みを吞んで投身または打ち首で死んだお

菊の井戸という意味が、また「八おV菊」には「幽霊となり人

を恨む女の名」（『擬人名辞典』）という意味がこめられていて、

本作第八章のお力が殺害されて人魂があらわれるという結末と

ひびき合うことになるのであろうか。それはたぶん考え過ぎの

率強付会の説といわざるをえなからうが、今しばらく「皿屋敷伝説」について見ておく。

皿屋敷伝説は、近世初めから伝承として広く全国十数箇所以上の各地に伝えられ、また十八世紀初頭の享保五年にはじめて上方歌舞伎に仕組まれて以来、浄瑠璃もふくめて幾種もの皿屋敷物が上演され、さらに講談や随筆類にも格好の題材として取り上げられてきた。一葉も皿屋敷伝説については当然一とありの知識は持っていたと思われるが、『歌舞伎年表』第七巻によると、ちょうど「にぎりえ」の執筆開始時にあたる明治二十八年六月に赤坂溜池の演技座で上演された『怪談実説皿屋敷』がある。これには青山主膳と腰元おきくが登場するが、その芝居の風評が一葉の耳にはいつていたということも十分考えられる。また十六年五月には、河竹黙阿弥の『新皿屋敷月雨暈』しんざやぶきつきあまがきが下谷・市村座で初演された。この芝居では腰元はお薫^{おきく}となって「菊の井」とは無関係に思われるものの、磯部家人・岩上典蔵の「やあおのれが妹は人でなし、貧乏暮らしに其日に困り、神明内の菊茶屋へ茶汲女に出て居たを、殿のお目に留つたは氏なくて乗る玉の輿、支度金をお貰ひ申し召仕になつたのは、この上もない立身出世、それを有難いこととも思はず、栄耀は餅の皮とやら密通して掟を破り、殿のお面へ泥を塗りし、

不屈者故お庭にて、お手討になつたのは其身に罪があつての事、所謂自業自得なるぞ」(中巻)といった台詞には、強い関心をひかれざるをえない。それは「菊茶屋」↓「菊の井」という名称のみならず、「にぎりえ」の構想そのものにもなんらかの影響をもたらしているのではないかと考えられるほどである。だが「にぎりえ」の内容への影響ということになると、明治二十八年上半年に東京で上演されたとされる(『歌舞伎年表』)すべての芝居、すなわち一回上演の先述「怪談実説皿屋敷」をはじめとして、三回上演の「積窓雪関扉」、一回上演の「小笠原諸礼聞書」、四回上演の「伊達競阿国戯場」系の伊達騒動物は、それぞれ「にぎりえ」中に出てくる大伴の黒主・小笠原流礼法・高尾伝説に關与してくることになって、どれもないがしろにすることはできない。そこには全面的な検討が必要となり、それはもう別稿にゆづらざるをえないことになるが、ただ明治二十年代後半の八お菊の井戸Ⅴにかかわるさらに他の話題に、因縁話めくが多少ふれておきたい。

皿屋敷の井戸は、牛込見付の英国公使アーネスト・サトウの私邸内にあったとも(鳶魚「足の向く儘」)、牛込御門内の弘田医学博士邸にあったとも(矢田掃雲「江戸から東京へ」)いわれているが、また他方麹町区四番町とも六番町とも噂されていた。それらの

なかで最も強烈な風評を生んだのは、麴町区上六番町の日清戦役当時陸軍中将・参謀本部次長の川上操六邸であったと思われる。地所千坪、建物は和洋二百坪のその邸宅は、「番町皿屋敷お菊の亡霊が出るといわれて、誰も住むものがなかった」屋敷を川上操六が買ったものである（篠田篤造『幕末明治女百話』）。川上操六は大将昇進後の三十二年五月敍元五十二歳の若さで死去したが、その川上邸を三十三年十二月には博文館の創業者・大橋佐平が購入した。一葉は二十九年十一月に没しているから、それ以後のことは全く関知しないことであるけれども、坪谷善四郎著『大橋佐平翁伝』を見ると、「日清戦争の当時」に川上中将がどんなふうにしてその邸宅を新築したかがよくわかる。坪谷の同書によると、その土地は三井一家の邸宅のあとと旧幕時の御家人の屋敷あとを併せたもので、設計を担当した岩崎家建築係の岡本春道なる人物は、川上邸新築に際して土地の全部を数尺掘りおこして検査し、五、六個あった埋井あとを発見してその底床まで掘り下げて瓦礫等の埋設物を除去、そのあとに小砂利を充填し十分に地盤を固め、造家学上にも慣習上にも豪も遺憾なきようにして新邸を完成したとある。徳富猪一郎著『陸軍大将川上操六』には、私事に関するそのような新邸建築のことなど一切書かれていず、したがってその土地購入・工事着手・竣工の

年月などは不明であるが、「日清戦争の当時」ということであればそれはちょうど「にぎりえ」執筆以前の時期に該当し、川上邸新築のニュースの一部やそれにまつわる風評は一葉にも届いていた可能性が十分ある。それにもまして留意すべきことは、かなりの知識人と思われる設計者の岡本春道や編集者・著述家の坪谷善四郎が、お菊の幽霊のことなどは信じていなかったにせよ、八お菊の井戸▽については多かれ少なかれ確かに意識していたという点である。さてそれで、一葉にも皿屋敷伝説や八お菊の井戸▽についての知識はいうまでもなくあったと考えてよいが、しかしそのことがすぐに本作における「菊の井」の命名に結びつくかどうか、その判断はここでは差し控えておきたい。なおついでにいうならば、その川上操六邸を購入して転居した大橋佐平は、まる一年もたたぬ明治三十四年十一月に六十七歳で死去し、それより先の六月には佐平の娘婿大橋乙羽が三十八歳で急逝している。乙羽は一葉を引き立てて「文芸倶楽部」に彼女の作品を載せ、その「文芸倶楽部」を出版していたのが大橋佐平を館主とする博文館であった。

「菊の井」の店名の由来について考察するとき、もう一つ忘れてはならないことがある。それは、漱石の実父・夏目小兵衛直克が命名した「喜久井町」という町名である。明治二年四月

Rights were not granted to
include this image in
electronic media. Please
refer to the printed
journal.

拾ひもの
予期しない値打もの。新開の光りが添はつた新

維新後の町名改正時に、名主であつた夏目小兵衛が家紋の「井桁に菊」にちなんで馬場下横町その他の地を喜久井町（當時・東京市牛込区牛込喜久井町）と改めたのである（『東京案内』、漱石「硝子戸の虫」）。いうまでもなく夏目直克と一葉の父・樋口則義とは東京警視庁に一時いっしょに勤務していたことがあり、漱石の兄の大一と一葉のあいだに縁談話らしきものがあつたとされている間柄であつた（塩田良平「樋口一葉研究」）。だがこの場合も「喜久井町」もしくは夏目家の定紋「井桁に菊」が、料理屋「菊の井」の店名の出拠だと断じうる根拠

井桁に菊

（沼田頼輔『日本紋章学』新人物往來社、昭和47刊より）

はなにもない。ただ、夏目家の定紋が「井桁に菊」であつたという事實は、△お菊の井戸▽という連想からまつわりつく「菊の井」の陰惨なイメージをわれわれから払拭することに役立つ。なおまたこの「井桁に菊」は、先引した一葉諸作中の「離に菊」の文様もしくは家紋（つまり離架菊）と類同のものであることも見落としてはならないであらう。

開の華やかさや勢いがつけ加わつた。すなわち、ひいては和田説にいう「（新開の）格が上がり、よい繁昌するようになった」の意。「添はる」は自動詞ラ行四段。抱へ主 お力の雇用主。菊の井の「女主」（女将）とは別と思われる。神棚へさへげて置いても宜い 水商売、客商売の店ではどこでも神棚を設け、福助のめおと人形・招き猫・金精様などをそこに置き、毎日また吉凶いづれの折にも商売繁昌のために祈つた。また貰つた祝儀なども神棚へ捧げた。そういうところから、商売繁昌に功德効験のあるお力を神棚へ捧げておいてもよいくらいだと冗談本気半々に言い、またそのことばによって間接的にお力をほめそやしているとこの、他の店々の人のことば。軒並びの 軒をつらねた各店ごとの。羨やみ種 羨望のたね。お前のごことから これは、お高が朋輩としてよく知っている（と思つている）お力の性格を前提としている言葉である。すなわちお高は、お力の性格を、物事をはつきりと割り切り、些事にはくよくよと思ひ悩まぬ気の強い性格、また「氣位が高い」と見ている。それはまた、読者の受けとり方でもあらう。しかし必ずしもお力の内面がそうでないことは、しだいに明らかにされる。身につまされて 他人事とは思えず、まるでわが身のことのよう感じられて。思はれる 同情される。宜いお客 金払いの

よい上客。思ひ合ふた 好き合った。仕方がない 他にやり方がない。つまり、好き合った二人の間柄を続けていくしか、他にやり方がない。年が違(マダ)をが 年齢の差があっても。お力を二十歳、源七を三十六歳と見るとその年齢差は十六年。お力を二十二歳、源七を三十二歳と見るとその年齢差は十年ということになる(拙稿「にこりえの背景」参照)。つまり年齢差は、最大十六年、最小十年の範囲内と考えられる。お内儀(かみ)さん 後述「奥様」参照。構ふ事はない 源七や源七の女房や、あるいは店にたいしても、気にすることはない。遠慮することはないの意。私しのは 緑雨本以下「し」送らず。私の馴染の男なんか。「なぜ」は「など」のなまり。野郎 男子にたいする一般的な卑称。「心がわりしたなじみ客をさげすんで呼んだ言葉」(和田説というのは、多少いいすぎ。諦め物 諦めねばならぬもの。「先生さまにも褒め物の子」(「大つごもり」)の「褒め物」と類似した言い方。別口へかゝる 別のものにとりかかる。すなわち、これから他の男を自分の情人にしようとする物色するという意。了簡一つでは 緑雨本以下「料簡」。(源七の) 決断しだいで は。三下り半 妻にたいする離縁状(縁切状、また去り状とも)。次のように、だいたい三行あまりに書きしるす俗制があった。

りゑん状

一 其方事我等勝手に付

此度離縁致し候然る上は

向後何方え縁付候共差構

無之仍如件

七月十一日

玉三郎(爪印)

ふゆ殿

(種積重述「離縁状と縁切寺」より)

遣られる 渡すことができる。与えることができる。氣位が高い 氣の持ち方・張り方が高く強く、やすやすと低きにつかないことをいう。現在用いられる(否定的な意味の)人を見下すような優越意識が強い意とは多少相異する。むしろ(肯定的な意の)氣品を高く保つ、高尚な氣概を持つに近い。「氣位が高い」は、氣性がしっかりしていて、他と競って負けをきらう意地・張りにも通ずる。そして「お力」という名は、次の鳶魚説からもうかがわれるように、右のような意味の「氣位の高さ」を体現しているとも考えられる。「江戸の女は、男好きといわれるほどの恥はないとしておった。…女が力んだり、威張ったり、栄誉がましく構えたり、我儘勝手を働く…、女の氣位が高い。」「女尊男卑といっても似つかわしくないが、「女

のほうか」値打がある、相場が高い、といった方がいいかと思う。「(蕭魚「女の世の中」) この江戸の女については、中山太郎も同意見である。「由来、京都女は情緒の纏綿なるところはあつたが、柔順を旨とするだけに張が弱く意地が少い。是に反して江戸女は薄情で伝法で加ふるにおき、やんではあるが、鼻柱が強く意地が強い。」(『売笑三千年史』) なお『当世書生気質』では、「氣位の高い」女との恋を第一等のものとしている。「色事にも階級あり。仮に其種類を分て見れば、上の恋、中の恋、及び下の恋の三種なるべし。意氣相投じて相愛する、是等は所謂上の恋にて……こは其人の韻氣の高きと、其稟性の非凡なるとを、景慕するより起れる恋にて、御前上等上々吉。」(第十四回) 三宅花園『蔽の鶯』でも、篠原子爵の養子でケンブリッジの留学から帰った篠原勤(作者が肯定している主要人物が、編物の内職によつて両親なきあと弟を育てている奥ゆかしく控え目な女性松島秀子をさして、「氣位が高い」といつている(第十一回)。

一処にならう 「一処になる」は、一緒になる意で、夫婦になる、所帯を持つ、結婚すること。ただし一葉は、小説・日記において「結婚(する)」という語を用いていない。このことは、同時代の文学作品においてもほぼ同様。夫だもの そうだから。源七に妻を離縁させ、そのあとがまに座ろうという下心

があるのならばよくないが、そうではないのだから、(源七を菊の井へ呼ぶくらいはなんの問題もない)の意。子細ここでは、さしきわり、問題の意。三河や この「三河屋」は、未定稿A・Cにあるように、菊の井のある新聞一帯をよいお得意場所としている酒屋の屋号と見てよい。一葉日記、明治二十四年九月十六日の条には紺屋(糸郷区湯島天神町二丁目二十五。野口碩氏注による)の名として「三河屋」が見える。また、嘉永版『江戸名物酒飯手引草』によると、「小石川伝通(院)前 長門寿し 三河屋仙藏」なる記載があるという(『白山三業沿革史』)。江戸へ出てきた商売人は、自分の出身地の国名を屋号に用いることが多かった。明治三十四年と昭和十五年の電話帳によると、次のようである(『東京百年史』八三三、『週刊読売』一九八〇・九・七)。

明治三十四年		昭和十五年 （酒屋のみ）	
伊勢屋	三八軒	伊勢屋	一七四軒
近江屋	三五〃	三河屋	八三〃
三河屋	三一〃	越後屋	三〇〃
大阪屋・万屋	一八〃	近江屋	一四〃
大和屋	一五〃		
尾張屋	一四〃		

御用聞き 得意先の注文をきき、また配達にまわる商家商店の

少年。使ひやさんを為せる 前述の酒屋の小僧に、手紙をとどける使い屋の役目をさせる。出入りの商店の小僧に、ちょっとした事などを頼むことは、よく行なわれた。その頼まれた事を、小僧や商店のほうでもお得意さまへのサービスのひとつと心得て、いやな顔をせず引き受けた。何の人お嬢様ではあるまいし 従来の諸説では「何の人、人お嬢様では……」と解し、小学館『全集樋口一葉』では「何の人、お嬢様では……」と読点を付している。従来は、「人お嬢様」という一語と見なされてきたのである。つまり「お嬢様」は、「敵」「主」「妻」などと同じく、特定のかぎられた人間の側から特定の上下関係もしくは対応関係にある人物をさす語と考えられている。それらの場合、たとえば第三者が他人の妻をただ単に「妻」と呼べば、そこには混乱が生じる。それをさけるため、他人の「敵」「主」「妻」を一般的に呼ぶ場合には、「人敵」「人主」「人妻」と称したと考えられる。いいかえれば本来的に「お嬢様」は、特定の上下関係にある人間、すなわち主家に仕えている召使いなどがその主家の娘にたいして用いる語であつたと捉えられているようである。たしかに一葉の諸作中の「嬢さま」（『別れ箱』『たま櫛』『五月雨』）や「我がお嬢さま」（『やみ夜』）というすべての用例に、そのことは当てはまる。（しかし現今では、いうまで

もなく「お嬢様」の用法にそんな意識は全くない。）ただし「人お嬢様」の用例は、一葉の他作中にも同時代の諸作中にも今までのところ見つけることはできない。それには「何の人、お嬢様では……」の場合には、「何の人」が問題になる。この場合「何の人」は、二葉亭四迷『浮雲』第十七回にある「『真個に本田さんは憤ッて来ないのだらうか？』／『何を？』／『何をツて、』と少し氣を得て、『そら、此間来た時、私が構はなかつたから……』と母の顔を凝視した。／『なに人、』とお政は莞爾した、何と云ツてもまだおぼだなど云ひたさうで。『お前に構ツて貰ひたいンで来なさるンぢや有るまいシ。』」の「なに人」と同じ用法ではないかと考えられる。前田勇『江戸語大辞典』によると、「なに人」は「なに人を」「なに人を、つけ」と同じで、「なに、人をつけにした」（何を人を馬鹿にした事を言うか）の略で、「相手の言を否定する応答詞。なあに。なにを馬鹿な。ばかばかしい。」意だとする。『全集樋口一葉』の岡保生氏の注も「なあに。何。」とある。「人お嬢様」の用例が見つからない限りにおいては、「何の人、お嬢様では……」と解するほうがよいのかもしれない。

御遠慮計申でなる物かな なにも遠慮する必要はないよ。
「御遠慮」「申て」という敬語は、直前の「お嬢様」という語に引

っ張られて用いられており、ユーモラスな効果をもたらしている。煙管掃除　こよりを「煙管」の吸口部からくだのなかに通し、火皿のところから取り出す。それによって、くだのなかに溜っている煙草のやにを除去するのである。余念のなきか　初出誌本文は「余念のなきは」であるが、緑雨本以下の諸本ではそれを作者の誤りと見て、「なき歟」または「なきか」に改めている。こどもそれに従っておく。一生懸命なのかの意。未定稿C（直前の下原稿）では「煙管掃除をはじめてうつむきたるまゝ顔をあげず。」俯向たるまゝ物いはず　直前のお高の長い話が、お力にいろいろ考えさせたのである。お力と源七が「思ひ合ふ」た仲であり、お内儀さんがあるからといって別れられる関係でないというお高の指摘は、まあそれでよいとしよう。またお高が親身になって源七に同情してくれているのも、悪い気はしない。けれども、源七との仲を続け、遠慮せず店へ呼び出したらよいというお高の言葉は、お力の心を察してくれたものかもしれないが、お力には同意できなかったものがある。お高は源七の子供のことにふれたが、お力の心にはその子供のこと**が強く引つ掛っている**。それがお高にはまったくわかっていない。（読者にも、この時点では全然わかっていない）お力は、そんなふうに自分の心境を見つめながら、お高の言葉を黙って

聞いていたのである。

やがて…奇麗に拭いて…ポンとはたき　しばらくの時間の経過と、お力の心の整理と、そして一つの決断とに対応している表現だと解すべきであろう。「ポンとはたく」は、吸がらをさせるの火皿から捨てるために、手の平や灰吹のふちで軽くたたくこと。雁首　させるの先端の雁の首に似た部分をいう。金属でできていて、その火皿の部分に刻みたばこをつめる。ちなみに、させるの竹製のくだの部分を羅宇ろうといい、口にくわえる金属製の部分を吸口という。すいつけて　緑雨本以下「すひつて。」他人へのサービスとして、自分が火皿に刻みたばこをつめ、火をつけて軽く吸い、他人がすぐに吸えるようにしてやること。土方の手伝ひ　「土方」は、道路・橋・堤防・溝渠などの築造新設や補修の現場に随時使役される日々雇傭の肉体労働者（日かせぎ人足）をいう。「手伝ひ」は、まだ一人前でない意。横山源之助「日本之下層社会」（明治22刊）によれば、土木用達組、有馬組、永井商会といった会社が東京府庁から右のような種類の土木工事を請負い、さらに人足親方によって貧賤から人足を集めさせた。一日の賃金は、明治二十八年ごろでは手取り（請負業者や親方が上前をはねる）二十銭ないし二十五銭ぐらい。この人足の場合は、親方とのつながりが大変薄かったとさ

れている。同書は、このほかに「土方人足」（土木工事に従事し、親方・見習とのつながりが強い）「工場人足」「手伝人足」（職人の下に属し、あるていどの技術が必要）「運送人足」（車力とも呼ばれ、人足のうち最も身体強壮）そして「立ん坊」（人足のうち最も劣等な情民）と計六種に分けている。あとで出てくる「車の跡押し」は、この六番目の立ちん坊をさす。情夫 芸娼妓等と特定の親密な情愛関係にある男性、すなわち愛人という。間夫、真夫とも。近世からの用語。昔しの夢がたり 過ぎ去ってしまった、とりとめなくはない出来事。源とも七とも 今まで「彼の人」（お高の言）「彼んな奴」（お力の言）「源さん」（お高の言）といわれてきて、ここで初めて「源」「七」ではないかと推定できるようなお力の愛人の名前の出し方に留意。

兵児帯 ^{へこおび} 男子が用いるしごき帯で、角帯にたいするもの。ここでは、兵児帯をしめた書生をさす。「兵児帯」の名称は、もと薩摩（鹿児島）の兵児、すなわち十五歳から二十五歳くらいまでの侍分の若者がしめていたところから起こったとされている。明治十五年ごろからは東京でも兵児帯が流行しはじめた（「明治世相編年辞典」）。生地は、縮緬（^{ちりめん}浜縮緬など）・モスリン（別称、メリンス・唐縮緬）・ガス縮緬、さらに白金巾・白晒（^{かみきん}・^{まじし}）などが用いられ、並幅で長さ六、七尺、そのまましごいて着流

しの上に二重にまわし、後ろ結びとする。（他に、子供用の小幅もあった。）地色は、白・鼠・紺・黒などがあったが、明治三十年ごろまでの書生は「白兵児」が多かった（江馬「日本服飾史要」、平出「東京風俗志」）。「うもれ木」の主人公は「白兵児」をしており、逍遙『当世書生気質』では「白木綿の屁子」とある。また『たけくらべ』には「紫の兵子帯」とある。石川さん村岡さん 書生たちの苗字。客の名を覚えておき、即座に親しげに呼ぶのが、営業上の手腕の一つ。冒頭のお高の場合もそうであった。いや相変らず豪傑の声かゝり、素通りもなるまいとて乙羽本以下「声かゝり」と濁点を補う。この箇所は二とおりの解釈ができる。一つは、原文のまま「声かゝり」で二語と見、「いや、相変らず豪傑（一）」という書生の声がお力に掛かり、書生は「素通りもできないだろう」といって」と解し、他は濁点を補って「声かゝり」という一語とし、「いや、相変らず豪傑のお力の声がかゝり（だ）、素通りもできないだろう」といって」と解するのである。筆者は今まで「いや相変らず」の語勢から判断して「……豪傑（一）」で切れる、すなわち「声かゝり」は二語とする解を採ってきたが（「にこりこの本文検討」）、文脈の流れからすれば後者のほうが適切だと改めたほうがよいかもしれない。（もう一つの当否の判定材料である

「相変らず」の被修飾関係を見ると、前者は「豪傑」、後者は「声がり」という体言のあとにそれぞれ同じよう、に断定の助動詞を補うべきだと考えられ、その点では判定は不可となる。」「豪傑」は、本来智勇などが衆にすぐれた人物をいうが、ここでは「客を逃がさぬすこ腕」(和田)であるばかりでなく、気位が高くて傍若無人のようにも見え、また思い切りのよい気性や酒の飲みっぷりなどもふくめ、だれも敵対する者のいない新開随一の酌婦お力をからかい気味にたとえた言葉。「声がり」は、ここでは目上の人からなされる特別の指示の意。ずつと這入る 蜀の井へ来なれており、また座敷のほうへ遠慮なし

に進みはいつていく様子。ばたばたといふ足おと 酒席の準備や注文をきくため、急いでやってくる仲働きの女の足音。姉さん 仲働きの女にたいする呼び方。あるいは「女主」(女将)にたいしてかもしれない。お力の言葉。乱舞の足音 酒を飲んで歌ったり踊ったり、元氣活発にいきり乱れる足音。三味線のひき方も、直前にあるように若く勢いのよい書生にあわせて「景気がよい」のである。「踊り狂う」という解釈は、過度にすぎよう。緑雨本では「果は乱舞のおともまじりぬ。」と改訂されている。

(未完)